

アジアを理解する ということ

— 2年間の香港滞在を終えて —

小 島 麗 逸

本稿は筆者の考えがまとまって書かれたものではない。まさにそれとは反対に、香港滞在中、研究の方法について持ちはじめた疑問が、何の解決も見出されず、頭の中を駆けめぐっている状態を、そのまま書いたものにすぎない。読者の御教訓を仰げれば幸いである。

I あるめぐり合い

「骨を埋める覚悟までされて、一家そろって北京にお歸りになったのに、どうしてまた香港へ出て来られたんですか」。

Y氏「先方のやり方が、初め想像していたことより、随分ちがったものであったからです」。

「たとえば……」

Y氏「北京到着後数カ月も、何も仕事を与えられず、ホテルにぼんやりしていたり、あちこち見て歩いていただけ。やっと仕事をやるようになったかと思うと、わたくしが数学を専攻している関係からか、小学校教育もほとんど受けていないような党の幹部に、2、3カ月で数学の基礎を叩き込んでくれってやってくる。わたくしのような青二才ならまだしも、科学院の有名な教授までが同じことをさせられる。こんな雑用をおしつけられたらまったく非能率ですよ」。

ここで、文化、科学の大衆化という中共の方針からしてこのやり方は当然であること、革命運動に長く従事していて正式の教育を受けてないことが問題となるのではなく、むしろそれより学習の意志が大切であることなど筆者の意見が、二、三述べられたが、論旨に直接関係がないので省略する。

Y氏「第一無茶ですよ、何も科学の知識のない党幹部が科学行政を牛耳る。給料も高い。党歴の長さが、科学行政の決定権にまで大きく影響してくるのでは、科学は伸びないですよ」。

中国には「先紅後專」という標語があり、まず思想の進歩性が要求されること、もし科学行政に党の官僚主義

があれば、それは重大で、中共自身常に警告を発していることなど意見の交換があったがこれも内容を省く。

Y夫人「その上就職したい場所でも、あちらでは自由でないのよ。以前アメリカの大学にいたときは、給料が1カ年くらい、何年間という形で契約がなされたのに、北京では、言われた所へ就職する以外に方法がないし、給料の良し悪しも撰択できない。日常生活は苦しくて、ちょうどわたくしたちが行ってから2カ月くらいして状態は悪くなる。店には買いたいものがあるても何もかも配給券、配給券で自由に買えない。それに比べて、香港は買いたいものは何でもあるし、就職先は好きなように選べるし……」。

これに対して中国の採っている労働政策や賃金政策が説明されたのも、

「生活が苦しいというのは、近代化途上にある社会ではごくあたり前で、ぼく自身日本で同じような経験をしています。たとえば、故郷は日本のある山村でしたが、子供のころ、戦時下であったためかもしれません、牛乳や卵など病気のとき以外には母がくれなかったことをおぼえています。風邪をひくと砂糖湯といって、沸騰したお湯に砂糖を入れて、のどを焼くようにして飲む。言ってみれば、牛乳や卵や砂糖湯、というのは、ぼくの山村では、そのころ薬扱いされていました。日本は1868年から近代化にはいったと言われていますが、近代化60年を経たあのころでさえ、一部にはそれほど苦しい生活が強要されていました。近代化とはすぐ楽園がやってくるものではなく、逆に従来以上の苦難と努力とを要求されるものではないですか。戦後日本が世界一といわれる経済発展をしているといわれていますけれども、これは明治や大正時代の人々の苦しい努力と蓄積の上になつたのであるし、いや日本人だけでなく、朝鮮人や、あなたがた台湾人、中国人に犠牲を強要して近代化が出来たんです。これらの事実を考えれば、今中国が近代化のほんの入り口にはいったばかりで、それこそ毛沢東の言う「一窮二白」の状態から始めたのであるから、どれほどの苦難を忍ばねばならないか想像できます。要はそういう苦難を乗り越えて開拓をする意志があるかないかということではないですか」。

Y氏「そりゃ小島さん、部外者の言うことだ。わたくしもアメリカにいたときは、同じような考えを持っていたし、國の将来につき強い確信を持っていたんです。でも現実があまり想像したこととかけ離れていて幻滅を感じたんです。小島さんも行ってみればわかりますよ」。

Y夫人「結局、小島さんは外国人の眼から物を見ていらっしゃる。中国人の苦しみはおわかりにならないですね」。

この対話の相手の中国人夫妻は、中学まで台湾で日本人教育を受け後に国民党政府の高等学校教育を受けてから、アメリカへ留学して数学を専攻し、アメリカでしばらく教職についていたが、北京へ帰るつもりで香港に一時滞在し、60年の初め、一生を北京に送るべく一家全部で北京へ引き揚げた（もちろん、かれにとっては、北京は生まれてから始めての地であった）。10カ月の北京生活で耐えられなくなり、再び香港に出て、現在は当地で教職についている人である。

ここで問題にしたいのは、愛國の情に燃えた一中国人夫妻が、いかにアメリカで悩み、北京に悩み、現在香港で悩んでいるかということではない。また中共政権の全般または科学政策をかれがいかに受けとめてきたかということでもない。さらに、一度アメリカ、香港のごとき生活程度の高い所で住んだことのある人が、建設の初期にある中国に住むことがどんなに苦しいものであるか、かれらが北京へ引き揚げることによって、台湾にいるかれらの両親、兄弟がいかに村八分にされたかなどを紹介しようとするものではない。あるいは、かれらの中共批判が、いかなる観点からなされ、それが中共にとってどんな意義をもっているのかまたその批判が中国政府の方針とどんな関係にあるのかなどを検証しようとするものではない。問題としたいのは、一外国人の苦悩を見ながら、「部外者」の立場に立って、ここに書き上げたいくつかの問題に興味を覚え、自分と切り離した関係のままで研究しようとする研究主体の精神構造そのものである。

II 一人の日本人の精神構造

「あなたは結局外国人の眼から中国をみているんですよ、」という意味のY夫人のことばを聞いた瞬間、心のすべてが崩れ去ってゆく思いだった。新しい中国の価値体系とかれがそれまで育った資本主義社会の価値体系との谷間にあって迷い続け、どこでいかにして生きてゆくかを模索している中国人に対し、中国に何の生活の場をもたない日本人である筆者が、中共の理論を使って説得する、これは考えてみればいささか奇異である。もしY夫妻に、中共の幹部か他の中国人が同じようなことを言って説得するとすれば、これは理のあることかもしれない。なぜなら、中共の理論は、中共が長い苦難と経験とをもって、自己の血と汗の中から編み出した理論で

あり、かれらにとって生きた理論であるからだ。したがって、かれらの説得には生命があると言えよう。これに対し、「部外者」が、生み出す経験と努力を抜きにしてその理論を使っただけとしたら、それは明らかに形だけの借用であり、実のないことばのやりとり以外の何物でもない。自分で生み出してないが故に、本人にとって意味のない理論を振りかざすとは、まったくのいわゆる客観主義者だ。多分この発言の背後には、いつしか中国人と同じ次元に生きているという無意識の錯覚があったのかも知れない。この錯覚は、日本人大衆の一人であるという自覚と中国人大衆の一人との連帯感という形で出てきたものであれば、錯覚として成り立たなくなるのに、まったくこれとは別個の、まさにそれとは逆の「超越主義者」として出てきたところに錯覚となる由縁がある。

そこでわれわれはこの錯覚の来源を追究しなければならない。中国は過去100年に及ぶ外国帝国主義の搾取と圧迫を自力ではお除け、近代化にはいったという認識。さらに、日本と中国との過去の特殊な関係から、過去の日本の中国に対する種々な人間としての罪意識。この二つの認識は、もし研究主体と中国の大衆との連帯感、同一問題から出発した態度を持つならば、錯覚は錯覚でなく別の方向に進んでゆくであろう。

だが、「客観主義者」はこの二つの認識をもつことによって、次の過程を経て、中国に畏敬の念を持つようになる。すなわち、この認識のうえに、中国は将来巨大な発展をする可能性の認識が付け加わると、「将来、中国研究は色々な意味で需要が出てくる」という打算が生じ、「努めて、中国の暗い部分を輝かしい部分で覆い被せる」という態度が出てくる。すなわちこの畏敬は権威に寄りかかろうとする心理であり、「中国研究の需要が出る」というのは、もっと実利的な実利を夢想する心理を創り出す。すなわち、権威主義と打算主義。両者が一つの行動の両側面となって、Y夫妻との対話にみられるような「超越主義」と「客観主義」を成立させる。これが、とりもなおさず、いつしか日本人でありながら、権威をもつ側の中国人の論理を使おうという錯覚を起こしたのである。これがY夫妻への説得を試みさせた態度の内幕であり、この態度にはY夫妻への同情もなければ、自分の問題の中で中国を見ようとする態度でもない。ただあるのが、将来「中国屋」さんになって、中国が何か一つ新しいことを打ち出すたびに、それをネタにして生きてゆくという打算の心理が作用していたように思う。

この精神構造から出発するならば、中共関係者に直接

に会った際には、不可解なほど低姿勢になって相手をほめる行動に出ようし、逆の場合は逆の行動が出てこよう。事実、中国の革命の意義と必要性とを強い愛国心に裏づけられて語るある中国人の友人の前では、低姿勢になっていた自分を発見することがたびたびあったことを告白しなければならない。またこのような種類の人間なら、中共政府が存亡の危機にあるとし、台湾の国民党政府が将来の中国の支配者になるだろうと大勢が決まっていると仮定（歴史的に将来大勢をおさめるというのではなくても）した場合、大陸からソ連へ留学し、台湾へ渡ってそこで内情についてゆけず、香港へ出てきた人がいるとしたら、多分、同一時点、同一場所で、「民主」とか「自由」とか「三民主義」とか「孫文先生の正統派だ」とかいう国民党政府のことは使って、その中国人に堂々と説得を試みるであろう。要するに研究の主体と客体との連帯がなく、打算主義と権威主義の上に乗っかって、中国やアジアをみていたのである。

現在日本の中国研究の中には、台湾の研究がほとんどない。「左」といわれている陣営の中ほど、台湾は無視されている。この現象は、この精神構造といささかの関係をも持たないであろうか。すなわち、中共側の対日外交3原則を、いかなる形でも台湾を語ることはタブーであると理解しているふしがある。つまり権威をもつ者への無自己の畏敬が、権威のない者への無視となって現われているらしい。同一の思考様式から出ているのだ。自己の問題の中から中国をみるならば、まさに台湾の内情こそ十分に研究され尽くさるべきであろう。

筆者の中にみてきたこの精神構造は、改米に劣等感をアジアへ優越感という過去に指摘されてきた日本人全体の姿勢と類似しているように思われる。日本人全体の思考様式が、多少にせよこうした傾向をもつ理由は、日本思想の研究者に任せねばならないが、ここではこれと関連して、香港で見聞したことを理解の一助としてつけ加えたい。

高度経済成長の利益の一部に預かって、最近多くの日本人が海外に出る。日本の玄関先である香港へは、旅行者だけで日に平均70人が立ち寄る。そのうえ香港在住の邦人は常時650人を下らない。そこで香港の現地人と日本人との接触があちこちにみられるのである。ある中国人が、日本は大戦を経ることによって、いかなる精神的な改造、進歩をもたらしたかと問いつめてきた。その中国人はアメリカの国籍をもつ学者で、祖国に対して強い愛国心を持ちながら、社会科学を専攻している関係から中

国に入れられず、現在アメリカの某大学で中国の歴史および教育学を講じている。かれはある日、ある日本人とパーティーに同席した。その場で、その日本人がかれおよびその日本人の連れてきた中国婦人に対してとった態度から話が始まる。かれが一つ一つ論述したその日本人の態度、行為は、生々しすぎてこうした文章に書くことは、差し控えなければならない。かれは過去、日中戦争中、北京、天津に住んだことがあり、戦後は復興間もない日本に中興政府要員として2、3年滞在したことがあるらしい。そこで、かれは、過去の日本人の北京、天津における態度と例の日本人の態度を比較しつつ、日本人の思考様式の暗い部分を問い詰めてきた。いかに小さな行為でも、その人の全人格を表現するような場合はたびたびあるものだ。それは潜在的にいつもその傾向をもっていて、ある微妙な環境・機会にほっと飛び出す。海外での行動も、この微妙な環境や機会の一つと考えられよう。それは日本社会の眼に見えない社会的拘束がすべてなくなり、人間が丸裸で、本人の責任においてのみ行動ができる環境であるからだ。もちろんその中国人が非難するような事態は、多くの日本人の中から見ればわざわざかもしれないが、問題は量の多少ではなくして、それが日本人一般の精神構造を表現しているある典型ではないかということと、もしこの仮定が成立すれば、それを作り出している日本の社会構造そのものである。

戦後、日本のアジアにおける地位は「アジア新秩序をもたらす先峰隊」から「アジアの一員」という形で表現されるようなものになってきた。重要なのは、表現上の問題ではなく、むしろ事実関係と精神構造の問題である。先に「その日本人の態度・行為は、生々しすぎて…」などという筆者自身にも不明瞭なことばで表現した。批判の目的対象が当人の生活の場である社会にあるがゆえに、大なり小なりの利害関係をもつので、こんな形で抽象的にしか表現できなかった。あるいは初めからの筆者の論を推し進めれば、まさにこういう態度こそ筆者によって非難さるべきものであり、自己矛盾を感じ、さらに自己嫌悪を感じる。調査研究はこうした当事者の利害関係をなくするような客観主義に立って行なわれるならば、研究主体の悩みはなくなる。たとえ、未文明の山奥へ行っても、まったくことばの通じない土地へ行ったとしても、この方法はまったく容易であろう。

III 地域研究のあり方

われわれ日本人は「アジアの一員」であると同時に、

アジア諸国民にとっては「部外者」であり「外国人」である。「一員」であって、「部外者」である社会と、いかなる関係を求めるべきであろうか。そしてその関係を求めるための調査研究はいかなる方法であるべきか。

「まず現地の人々の考え方を卒直に理解せよ」ということばがしばしば使われるが、このことばは何事をも言っていない。いかなる階級の人々の考えなのか。どんなふうに理解するのか。理解するとはただ事実を知るといだけなのか。

われわれの生活の場は、アジア地域とは間接的に結びついているだけで、われわれの生命とその糧は日本社会の中で保証されている。こうしたわれわれの一人が、日本から送金されながら香港に滞在し（住みつくのではない）、住むべき土地を失った中国人に相対するとしよう。かれは国民党の腐敗を憎みつつも、共産党とは相入れないで、香港に住んでいるとしよう。かれにとって当面の生活の場は香港以外にはありえない。もし香港に新しい事態が発生し、その地を追われるようなことになったとすれば、国と民族を捨てて外国に行くより仕方がなくなる。実際に香港にいる多くの金持ちはアメリカで生活を築くことを計画している。外国へ行かれる人はいいとして、香港より出られない人は、この地に住み着く以外に方法はないのである。こうした中国人のかれの心情を、暫時の1、2年だけ滞在しているわれわれの一人が「客観主義」と「超越主義」とは別に、いかなる理解の仕方ができようか。同様に、100年の帝同主義者の圧政と残酷を経験し、「一窮二白」の状態から脱け出そうとしている民族の心が、すでに高所得者となって外部から生活の糧をもらっている一人の「部外者」は、いかにしたら理解できるであろうか。香港政庁から6カ月単位の居住証明書をもらう。金は外部からもらう。人の国へ客人としてはいいこむ。主人の貧乏なのをよそに、おのれは外に糧を頼りつつ、その家から出られない主人を左うちわで批判する。いや批判する当人は左うちわとは思っていないかもしれないが、血や汗を流してきている主人にとっては「左うちわ」と見えるのである。あるアメリカ人の友人が、まもなく香港を去って帰国しようとしていたときだ。台湾海峡の雲行きが危しくなってきた。その友人いわく、「ぼくたちが帰りに台湾へ寄って、あそこの研究資料をみる間だけでも、ケネディは台湾政府に戦争をしかけることをやめさせてもらわなくては……」。もしこのことばを台湾人が聞いたらどう感じるか。その友人のことばは、糧を外から保証されながら主人を批評する

客人の態度を象徴的に示している。もしや筆者が同じ位置に置かれていたら、多分同じように考え行動しただろうと思うと気が沈んでこざるをえない。これが中国（アジア）を理解しようとする「部外者」の考え方のなだ。

香港には難民と言われる中国人が多数いる。かれらに対して香港政庁はもちろん、アメリカを中心とするいくつかの宗教団体や富裕華僑が援助を差し伸べている。しかし、援助供与者側は「難民」とはまったくちがった山の上のすばらしい風景の眺望できる場所に、豪華な生活を送る。もしや香港に一旦ことあれば、たとえば水がなくなったとか、コレラが大流行したとかなんらかの生活の危機が訪れたとすれば、おそらくまっさきに生活圏のある所へ引き揚げるであろう。難民の発生や貧困の発生は、まさに生産活動を基盤に持つ生活の場がないことから起こる。革命の動機もここにあったように思われる。ある金を施す行為は尊いものではあるが、生産活動の場を保証する行為には及ばない。だからといって食に飢え、寒さに震える人に援助を行なうことは無意味であるというのではない。客人の主人理解はほとんど不可能であると言いたいのである。

ことばが堪能であることも少しも理解を助けない。若い愛國心に燃えた研究者が、筆者に日本人はまだどうして「支那」ということばを用いるのであろうかと指摘してきた。これはかれが多く日本人と会合した後の発言である。本来このことばの中には、中国人にとって何も屈辱的な意味ははいつていなかった。日中戦争を経ることによってこのことばにある意味が付与され、それが中国人の心理にある感情をもたらすようになった。その研究者の指摘以後、このことばに極度に神経質になり、日本人に対してはそのことばをいかなる感じ方で使っているか中国人に対してはどのような感じで受けとめるかを折あるごとに問うてみた。その結果、使用する側の日本人はほとんど特別な関心をもっていないことを発見し、「中国」ということばより「支那」のほうがはるかに多い頻度で使用されていることを発見した。年齢的に言えば、27、28歳を境にして、上が「支那」、下が「中国」をより多く使用する。聞くほうの中国人は、「右」も「左」も「中立」もない、すべてが悪感を催すという返事であった。もっともある人は「あなたたち若い人には責任がないのだから」といって無理に弁解をつけ加えてはくれたが。また同じ中商人が、外国人としてはめずらしいくらい美しい北京語を操る日本人の中国語を、まだ「和陸」とか「中日親善」とかいうことばを用いるほど古い中国

語だ、かれの中国語は耳を刺すと評していた。新しい中国語でなら、「和睦」は「友誼」、「中日親善」なら「中日友好」となるのであろう。以上のことから、ことばの出来、不出来は、他民族を理解するか否かとはまったく別問題であることが知られよう。

学問で平常言われることに「事物を客観的に理解する」ということばがある。これとこれまで立証してきた「経験のない者は経験のある者を理解する資格がない」ということとはいかなる関係をもつか。忠実に相手の主張することを日本語で謙訳しても、「事物を客観的に理解する」ことにはならない。これはたとえば、「山」ということばを聞いて、日本人ならあの壮麗な富士や燦然に忙しい浅間山を思い出すのに対し、スイス人ならいつも雪に覆われた険しいモンブランを、そしてネパール人なら険しくそそり立つヒマラヤの連峰を、思い出すのと同じ理由からである。すべての概念規定は、歴史上の諸経験をふまえて用いられているのである。これも一つの例であるが、中共の政治理論の中によく用いられることば「民主集中」を、中共の英文版では、democratic centralism と訳されている。この訳について、イギリス人の友人が、democratic centralism とはまったく無意味だ。どう解釈してよいかわからないと異議を申し立てた。弁証法的な思考様式をもたない人であれば、当然の疑問かもしれないが、かれにとっては、「民主」と「集中」とが並列に並べられてしまい、「民主」は「集中」があるからこそ存在するという論理がわからないらしい。おそらくこれは、長い革命斗争の中から党の組織論として成立してきた過程を知らないかぎり、その意味することばの内容はわからないであろう。要するに「事物を客観的に理解する」ことはまったく不可能なことであるということがわかる。

先に「客観主義者」「超越主義者」の精神構造が否定的態度から分析された。今ここでは、「事物を客観的に理解しよう」とする態度、すなわち他国・他民族の価値体系をそのままの形で理解しようとする態度は、始めから不可能性を追い求めることだと結論した。

そこでわれわれが志向する方法は、研究主体の意識と研究客体の大衆の意識と結びつけることによって、研究の素材が選ばれ、研究がなされるというものである。ことばを換えて言えば自己の問題、あるいは自分を取りまく社会の問題、すなわち日本の問題の中からのみ研究客体が問題とされるべきであるということにはかならない。そしてこの自己の問題・日本の問題は、われわれの日常生活実践、生産活動の実践の中からも、認識される

ものである。

例を拾ってみよう。中国研究に関してはわれわれは多くの労作をもつが、1930年代に限ってみると、「部外者」の研究家の作品で中国を本当に理解していたと思われるのは、スメドレーとスノーであろう。かれらは共産主義者でもなかったし、東洋人でもなかったが、かれらの当時描き出した中国が、そのまま正しい歴史の検証を受けている事実をみると、「地域の大衆の意識」を見抜くかれらの問題意識とその方法に、多分に教えられるところがあるのである。スメドレーの場合を考えてみよう。彼女は朱徳を描いているが、裏のところ、朱徳が偶然とりに上げられたにすぎないのであって、周恩来や劉少奇でもよかったし、極端に言えば、八路軍の一兵士が取り上げられてもよかつたろう。朱徳はただの素材として取り扱われ、その素材の中に、スメドレーの問題自身が語られているのである。研究主体としての彼女の意識と、研究客体である朱徳および朱徳を生み出した社会の大衆の意識とが、接合点を見いだして、古典となりうるような中国理解ができたとと思われる。もし研究主体が、自己の生活実践・生産活動の実践からつかみ出した問題および意識が、研究客体である中国人大衆、アジア諸国民の意識とかけ離れているならば、その研究者は、もはやこの地域の研究者たる資格を失なうものと思われる。そしてやがて「超越主義者」や「客観主義者」へと転落してゆくであろう。過去の日本の西ヨーロッパから「学ぶ」という態度を引き映しても、アジアの理解には役だつまい。地域研究の具体的なテーマは、この線に沿って設定され、それにふさわしい方法論が用いられよう。ある地域や時代では、思想方面から物を見るほうが有効な場合もあるし、ちがった地域や時代では、経済学や社会学の方面から接近することが目的にかなうかもしれない。それは研究者の能力と関心によって決まってくるであろう。

以上の小論からの結論として、次の三つが得られる。

(1) 地域研究主体は、まず自己の精神構造へのきびしい反省が必要であること。

(2) その精神構造を生み出してくる社会の背景に眼が注がれるべきこと。

(3) この中から自己の問題を引き出し、それを通して地域の研究客体および研究目的を設定すること。

本論ではもっとも重要な自己の問題、日本の問題については何も述べられていない。ただその発見への糸口として書かれたものにすぎない。

(アジア経済研究所調査研究部第1調査室)